

「知識の習得」から「意味理解」へ 「学習の本質」の捉え直しが、学力底上げの鍵

本特集では、学校現場の実践事例と各種データを基に、広がる学力格差の実態と課題解決の方策を探ってきた。それを受けて本稿では、教育心理学・教育方法を専門とする上智大の奈須正裕教授とベネッセ教育総合研究所初等中等教育研究室長の木村治生に、事例校の取り組みの総括と学力の二極化の解消に向けた展望について語ってもらった。

今の教員は全ての生徒に責任を持つとするとする気概が高い

木村 PISAの調査によると、日本は家庭環境による子どもの学力格差が諸外国に比べて小さく、国際的に見ると、学校教育が平等化を実現しているといっていると思います。一方で、現場の先生方には、学力格差への対応が難しくなっているという感覚があるのも事実です。中学校の先生に話をうかがうと、「家では勉強できない」「塾に行けない」など家庭による違いがある中で、学校がどこまで出来るかを真剣に考えている先生が多く、その点は非常に心強く感じています。

奈須 文部科学省の「全国学力・学習状況調

査」の結果を見ても、学力の分散は縮まっているという印象があります。二極化が課題になっているとすれば、それはむしろ先生方の意識が高まっている証拠ではないでしょうか。特別支援教育の充実に代表されるように、「どのような生徒であっても、自分たちが責任を持って指導する」「社会的公正を実現するために、全ての生徒の発達を保障しなければならぬ」という気概が高まっているのは、素晴らしいことだと思います。

管理職のリーダーシップと生徒の視点に立った取り組みが秀逸

木村 今回紹介した学校事例では、各校の特色がよく表れていました。自校の課題や特徴

を正確に捉え、自分たちが使える教育リソースを最大限活用し、解決に向けて果敢に挑戦されている姿が印象的でした。

奈須 3つの事例校は、これまでの定型的なノウハウにとらわれず、斬新なアイデアをどんどん出して、「まずはやってみよう」という前向きな姿勢が見られました。特に、校長先生がリーダーシップを発揮して独自性を打ち出し、先生方はそれを受けとめて自由闊達かつたうに議論をするという雰囲気、どの学校にもあったように思います。

何よりも重要なのは、生徒の視点に立った取り組みになっている点です。朝倉市立十文字中学校が行う大学キャンパス訪問（P.15参照）のように、近くに大学がなく、将来の

広がる学力格差への多様な取り組み

上智大 総合人間科学部教育学科 教授

奈須正裕

なす・まさひろ◎東京大大学院教育学研究科教育心理学専攻博士課程修了。博士（教育学）。専門分野は教育方法学、教育心理学、カリキュラム論。主な著書に『子どもと創る授業』（ぎょうせい）、『知識基盤社会を生き抜く子どもを育てる』（ぎょうせい）などがある。



ベネッセ教育総合研究所
初等中等教育研究室長

木村治生

きむら・はるお◎初等・中等教育領域を中心に子ども、保護者、教員を対象とした意識や実態の調査研究、教育市場（産業）の調査などを担当。文部科学省や経済産業省、総務省から委託を受けた調査研究にも数多く携わる。現在、東京大客員准教授を兼任。

イメージが湧きにくい生徒たちに、大学生の姿を見せて志を持たせるといふ発想は、学習させて学力を高めようという従来の学力観にとらわれていたのでは、生まれなかったのではないのでしょうか。立川市立立川第一中学校でも、生徒が補習に参加しやすいように、時期や時間割を工夫するなど、生徒側の視点に立って補習を企画しています（P.11参照）。限られたリソースをどのように配分して最適化を図るのかという、良い意味で民間企業的な発想が表れていました。

木村 立川第一中学校が行っている、通知表を終業式の3日前に渡すという取り組みも印象的ですね（P.12参照）。「全国学力・学習状況調査」の結果を見ると、自分で計画を立てて学習したり、テストで間違えた問題を学習したりする子どもの学力が高いという結果が出ています。また、そうした学習方法の指導をしている学校の学力が高いことも、明らかにされています。ただ量をこなせばよいのではなく、自分の学習を振り返って、何が出来なかったのかを客観的に把握することが大事であり、そこから生徒自身が目標を決めたり、どういう学習手段が使えるかを考えたりすることが、学力向上には欠かせません。

奈須 学習の基盤である学校生活を安定させることも大切です。その点、青森市立沖館中学校では、生徒と教員との距離が近いことに加えて、教員同士が結束し、学習の基盤を整

えていました（P.8参照）。生徒の生活や生き方にまで踏み込んで学習意欲を引き出していくというのは、日本の先生方のすごいところですね。

学力下位層の課題は 学習量よりも学習方略にある

木村 課題整理でも示したように、学力上位層と下位層の違いを検証していくと、学習をプランニングする力や、自分の学習状況をモニタリングする力に、大きな差があることが明らかになっています（P.5参照）。学力格差を解消する上で、そうした学習方略にも目を向けていく必要があると考えます。

奈須 学習が苦手な生徒は、必ずしも学習をしていないのではなく、学習の方略に課題があるのです。そのため、頑張っても報われない場合が少なくありません。努力するベクトルの方向が間違っているのです。沖館中学校のスタディタイムが成果を上げているのは、教員が生徒の側について、質の高い方法で自学自習を出来ているからだと思います（P.6参照）。

授業でこれだけ勉強しているのだから、学習の仕方にも身に付いていると思っっている先生方もいらつしゃるのではないのでしょうか。例えば、国語では、文章のどの部分に注目して、主人公の気持ちをどう考えるかという方法論が、授業で繰り返し行われています。しかし、

いざ別の文章に取り組もうとした時に読解できない生徒は少なくありません。授業で学んだ手法を自分で使えるようにするためには、先生が示した方法を一般化して受け止めることが必要であるにもかかわらず、多くの生徒は、授業中に先生がなぜこの発問をするのか、このような指示を出すのかを分かっていないため、自分のものにする事が出来ていないのです。

従って、生徒が授業で経験したことの意味付けを、教員が明示化する必要があるでしょう。その上で、その方略の何が良いのかという理由までも説明し、実際に自分1人で取り組ませ、効果的であることを生徒自身に実感させるのです。更に、家でもそれに取り組ませて効果を確認させ、今後も続けるように励まします。そのような過程を経験して、初めて生徒の中に正しい学習方略として定着するでしょう。

木村 課題整理の図3 (P.5参照) で示したように、「○つけをした後に解き方や考え方を確かめる」という子どもが下位層に少ないのも同じ理由かもしれません。解答解説の答えを見て、単純に○を付けただけ、あるいは×を付けても、どこをどう間違えたのかを確認しない。なぜ自分で○つけをするのかという意味が分かっていないため、ただ「作業」としてやっているのです、同じ間違いを何度も繰り返してしまうのです。

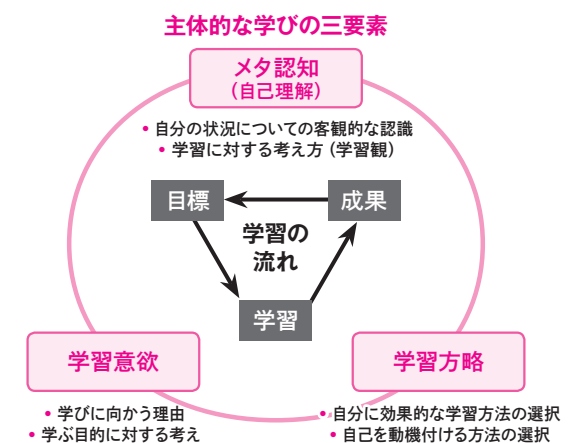
学習意欲を高める要因は「自分への期待」と「価値の向上」

木村 学校事例では、基礎・基本の定着だけではなく、学習意欲にも切り込んでいた学校が多かったと思います。手厚い補習を行い、生徒に出来る喜びを体験させる立川第一中学校や沖館中学校、表彰制度や検定取得で達成感を味わわせる十文字中学校の取り組みから、学力の定着の土台には、学習意欲の醸成が欠かせないことを改めて感じました。

奈須 意欲を高める要因は2つあります。1つは「期待感」、つまり「課題の達成やその手段となる行動をどれくらいうまくやれそうか」に関する自信です。これは認知の一種ですが、立川第一中学校の補習や沖館中学校のスタディタイムのように、強制的に学習に向かう時間をつくり、「授業以外で初めて机に向かって勉強した」「今まで分からなかったことが分かった」「自分でノート1ページの勉強が出来た」といった実感を持たせることで、生徒の中に「やれば出来る」という期待感が生まれ、「もつとやってみよう」という意欲が喚起されるのです。

もう1つは「価値を高める」ことです。十文字中学校の大学キャンパス訪問や社会人講話などの取り組みは、多様な価値観を提示する上で効果的だと思います。勉強して大学に行けばこんな研究が出来る、こんな素敵な人

図 主体的な学びを実現する学習モデル



*「自己調整学習モデル」を基にベネッセ教育総合研究所で作成

生が待っている。そうした「あこがれ」をつくることによって、学習の価値を高められれば、意欲も高まるのです。

木村 十文字中学校の「文中寺子屋塾大賞」のような表彰制度 (P.17参照) は、今ではほとんど聞かなくなったように思います。上位層向けの取り組みですが、どの生徒にとっても学習意欲につながるものではないでしょうか。

奈須 報酬は、それが絶対に得られないと分かっている生徒には「罰」として機能する怖さがあります。しかし、表彰する自身が、「社会において、どういう生き方やあり方に価値があるのか」ということを伝えるメッセージになっていけば、多様な価値観を伝える情報としてとても有用です。

十文字中学校では、「十文字中学生のモデル

広がる学力格差への多様な取り組み



としてふさわしい人物」を基準にしています
が、そうした学校が考える価値をどのくらい
豊かに明示できるかが、取り組みの鍵になる
でしょう。例えば、成績は良くななくても、い
つも先生をてこずらせるような質問をした、
提出物はいつもいちばんに出したという生徒
を表彰してもよいと思います。多様な観点で
問いを持てる人、約束事をきちんと守る人は
立派であるというメッセージになり、知識一
辺倒の学習観を変えるきっかけにもなるかも
しれません。

学習の本質は 「知識習得」の先にある「意味理解」

木村 学校事例では主に授業以外の取り組み
を取り上げましたが、学力格差を解消するた
めの王道はやはり授業改善だと考えます。事
例校も含めて、多くの学校で学び合いや習熟
度別授業など、さまざまな実践が工夫されて
います（P.19参照）。格差の解消という観点
から、今後の授業改善の方向性について、ご
意見をお聞かせください。

奈須 今の教育の世界的な流れは、「どこま
で子どもに任せられるか」というところに力
点が置かれています。協働的な学びで学習を
深めていく、正解を覚えさせるのではなく生
徒自身が意味を形成して思考を深める、教科
ならではのものの見方や考え方、問題解決の
戦略を見付けるといった、単なる知識の習得
ではない広がりを持っています。

学び合いは、教える側になりやすい学力上
位層にとっては無駄だという方もいますが、
それは、「正解を導くことが学習、既存の知
識を身に付けることが学習」と考えているか
らです。学習とは、皆で意味を形成しながら
納得するものだ、私は考えます。自分が出
来たから先に進むということではなく、隣の
子はなぜ分らないのか、その分からない度
合いを知りたい、自分が理解した意味をみん
なに伝えて納得させたい、仲間と一緒に理解

することが出来た。そうした喜びが内発的動
機付けを高め、より深い学びを目指していく
というのが、「学び合い」の本当の意味での
価値ではないでしょうか。最近、数学教育の
世界で、「答えが出てから本当の授業が始ま
る」という考えが広がりを見せています。問
題が解けて終わりではなく、なぜこの解き方
でいいのか、他人に説明できるところまでを
学力と見なそうという動きです。

木村 生徒たちが充実感を持って学べる授業
をつくりたいという思いは、多くの先生がお
持ちです。ただ、学び合いや協働学習が生徒
の意欲を高めるということを理解してい
ても、習得型の学習で基礎学力を保障するとい
う方法論に慣れている先生方が、まだまだい
らっしゃるのではないのでしょうか。まずは、
先生方や保護者などの大人が、学力観・能
力観を変えていく必要があるのかもしれない
ん。

奈須 学習の本質は「知識・技能の習得」の
先にある「意味理解」です。生徒がもつ意
味を分かりたい、世界の広がりを知りたい、
知識がつながって来るのが面白いということ
を学習の中心に据えることが出来れば、学び
の概念は大きく変わるはずですよ。先生自身が
学習の本質を捉え直し、授業を変えていこう
という意識を強く持つことが、これまで以上
に求められていると思います。

木村 本日はありがとうございました。